

# 短編をぶん投げる

笹案

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんか書きたいなと思った作品をぶん投げます。

日常だったり、恋愛だったり、ファンタジー的なあれだったりします。

どれも1話完結の短編です。

なろうとマルチ連載していたりします。

# 目次

かえりたい	1
幼馴染に手紙を送る話	4

かえりたい

「かえりたい」

潮が薫り、さざ波の聞こえる場所で、体育座りをした少年は呟いた。かえりたい。そう呟いた声は小さいものだったが、自然音くらいしかしないこの場所には打つように響き渡った。

「かえりたくないあ」

もう一度、今度は寂しさの滲む声で呟いた。

人のいないこの場では誰も聞いていないが、もう一度呟いた事で満了したのか、少年は立ち上がって歩き出した。

しかし、少しの時間をかけて足を止めたのは、少年の家の前ではなく、またしても真つ暗な洞窟の中だった。

少年は洞窟の中でひとり、ちやぷり、ちやぷりと水滴が落ちていく不規則な音を聴く。目をつぶり、音に耳を傾けると不思議と気分が落ち着くようだった。

しかし、ここは少年がかえりたいところではない。そんな当たり前な事実が突き刺さる。

だから少年は目を開けて立ち上がる。

真つ暗な洞窟を抜けると、外はもう真つ暗になっていた。この暗闇は少年の求めていたものと似ている。

だから、一人で外に出たら何かが変わると考えていたのだが……どうやら、思うような結果は出なかったようで、少年は一人ため息を吐いた。

少年は一歩足を踏み出す。舗装された道がなくなり、砂浜へと続いていた。砂に足をとられてそうになりながらも、堤防となっているかも怪しい緩やかな斜面を登り、なんとか海辺を抜け出した。

ぼつりぼつりと灯りが灯っている。少年はそれを少し眩しそうに見ながらも歩みを進める。数分も経つと建物が見えてきて、辺りから美味しい匂いが漂ってきた。

どうやらもう夕食の時間らしい。

それを認識した少年のお腹がなった。

生憎にも今の持ち合わせは、小さなガマ口財布に入れた雀の涙ほどの硬貨しかない。飲み物が一つ、それか少年の大好きな梅のおにぎりが一つ買えるくらいだ。

「買えるけど……」

少年は肩を落とす。

おにぎりを買えはするが、そうしたら飲み物が買えなくなる。飲み物を買ったならおにぎりが買えなくなる。喉がカラカラでお腹もペコペコな少年には、どちらだけの選択なんて出来そうもなかった。

「……帰りたい」

途端に少年は母親の手料理が食べたくなつた。更に言うなら、温かい料理が食べたくなつた。梅のおにぎりもあればなお良い。

現金な事を考えながら歩いていくと、見慣れた街並みに近づいていく。

「ただいま」

家に帰った少年は、お腹の膨らんだ少年の母親にこつてりと怒られた。げんこつだって食らわされた。その後には説教を何十分もされた。しかし、その後には優しく抱きしめられた。

まだ少年は、自分を抱擁する母親のお腹に頭が当たる程度の背丈しかない。しかしそのお陰で、お腹の中にとくり、とくりと脈打つ存在がいるのを感じる事が出来た。

少年はひとりっ子だ。しかし、もう少しで兄になる。弟なのか、妹なのかはまだ分かっていないが、どちらにせよ、母親のお腹の中の鼓動は、少年に兄となるという自覚を持たせるには充分なものだった。

だからこそ——少年はかえりたいと思うようになった。

産まれてきた下の子は、きつと喉が枯れるまでに鳴いてしまうだろう。母親だけに任せるのではなく、自分も下の子を泣きやませないといけないと少年は考える。立派な覚悟に見えるが、少年はただ、弟か妹となる存在と遊びたいだけだ。

しかし、そんな少し先の話よりもまずは目先の問題だろうと、少年

はまだ機嫌の良くないように見える母親を仰ぎ見る。

何とか母親の腹の虫を治めようと、ご機嫌取りに夕食をついだお皿を食卓に運び、仕事が終わりに家に帰って来た父親にも怒られて、それでも許してもらえて家族全員で食卓を囲む。

温かいご飯を食べ、お風呂に入り、上がった少年は頭まですっぽりと毛布に包まってもうひとこと。

「……還りたい」

小さな体躯を丸め、暗闇の中で幾度となく呟いた言葉を口にして、そつと目を閉じた。

## 幼馴染に手紙を送る話

「《魔法使い》の能力ですね、おめでとうございます」

その言葉を聞き、隣に立っている少女に目をやる。絹のように艶やかな銀髪と蒼色の瞳。人形みたいに整った幼馴染の少女は、驚いたように神託を告げた神父を見ていた。

物語でしか聞いたことがないような能力に、俺の心はときめいた。昔から完璧超人の幼馴染だったから、そこまでの驚きはなかった。

でも、でもだ。俺の能力が《雀の涙ほど強くなれる》ってなんだ。曖昧すぎるしふざけているだろ。こちらを心配そうに見てくる幼馴染を見て、ため息を吐きたくなった。

能力を持てば何かが変わるのだと思っていた。しかし、そんなことがあっても日常は変わらなかった。

村は平和だし、することがないなら家業を手伝えと父さんに言われる。幼馴染がたまに森で魔法を使っているのを見ていたから、負けるもんかと斧を振り回すと父さんからゲンコツを食らう。

しかし、そんな日常は長くは続かなかった。俺たちが神託を告げられた五年後のその日、知らせはモンスターの群れと共に訪れた。俺はモンスターを前に無力だった。村の男たちは必死に戦っているのに、俺は何も出来なかった。それに引き換え幼馴染は、自慢の剣捌きと魔法であつという間に敵を蹴散らした。

モンスターを斬った時に付着した液体が滴っているものをそのままに、幼馴染は俺に話しかけてきた。

「キコリ、聞いてください。今、魔族が世界中を恐怖に陥れています。そのボスである魔王も封印から解かれようとしています。それを裏付けるように、この前に三〇〇年ぶりに《勇者》の能力を持つ人物が現れたそうです」

不老不死である魔王の復活を阻止するために、数百年間隔で現れる《勇者》だけが、魔王を再度封印することが出来るらしいと伝承で聞いたことがある。

彼女が話しているのは、つまりはそういうことなのだろう。

「魔法を使う能力を持つている人は、希少であると神父さまは言っていました。これほどの力を持つているのなら、勇者様のお力になれると言ってくださりました。……私は行かないといけません」

ぎゅつとスカートの裾を握りしめ、何かを耐えるように告げた幼馴染を見て、先程の光景を思い出す。でも、彼女は決意を固めていた。引き止めることは出来ない。

「お、俺もついていくよ」

「キコリが危険だから……ごめんね」

いつも冷静沈着な彼女にしては珍しく、心底困ったような顔で言わせてしまった。これでは俺が悪役になってしまったようだ。

だけど、このままお別れだなんてあんまりだ。せめて、笑顔で送り出してやりたいから、俺はにと口角を上げた。

「……たまには、手紙でも送ってくれよ」

「……はい、もちろんです」

俺たちは指切りをして再会を誓い合い、幼馴染は夜明けと共に村の人全員に見守られながら旅立った。

しかし、手紙を送ると言っていたにも関わらず、中々便りは来ないままに時は過ぎていき、ひと月が過ぎたころのある日の夜、母さんが見慣れぬ鳥から受け取ったと、一つの手紙を渡してきた。送り主は一人しか心当たりがない。急いで自分の部屋に行き、手紙の封を切った。

『どうもなじみです。』

キコリは元気に木を切っていますか？

私はキコリが木を切っているうちに、魔族やモンスターどもをバツタバツタと斬っていました。おみやげは敵幹部の首でいいですか？

元気なら一報ください』

待った末の手紙がこれだ。脱力感が身体を包んだ。

いつの間にか幼馴染が物騒になっているし、幼馴染の居場所知らないのにどう送れと言うのだろうか？

彼女のぬけ具合が少し懐かしく感じたし、幼馴染が無事だという事

を知れて良かった。そうして俺はベッドで目をつぶり、久しぶりに安心して眠りについた。

次の日は、幼馴染の両親の家に手紙を持って顔を出し、その後には父さんに仕事に連れていかれた。毎日斧を振り回してばかりで辛い。自分が斧を振るためだけに生まれてきた機械なんじゃないかという気分させられる。でも、仕事終わりに幼馴染の手紙を読み返すと元気になれた。彼女だって頑張っているんだ、俺も頑張らないと。

そんなことを考えながら生活していて、最初に届いた手紙からまたひと月経ったころに新たな手紙が届いた。

今はどうやら海にいるらしい。手紙の中に入っていた貝がらを鼻に近づけると、微かに独特な薫りがした。これが、海の薫りってやつなのだろう。

貝殻の一つを母さんに見せると、小さな巾着袋を作ってくれた。俺は、それをポケットに入れて家を出る。

幼馴染の真似事という訳ではないが、最近には村の用心棒と共に魔物が来ていないか村の周辺を巡回している。父さんの仕事に連行されない日は全て埋まってしまった。だが、みんなから感謝されるのは悪くないし、野菜だつて分けてもらえるし、料理のおすそ分けもしてもらえるようになった。危険は以前にも増したが、充実した日々となった。

幼馴染からの手紙は、ひと月ふた月くらいの感覚で届くようになった。手紙は、いろんなキャラバンに雇ってもらいながら魔王城に向かっていているとか、旅先の景色や幼馴染が驚いた独特な風習について、そして必ず俺の身を案じる言葉が書いていた。

ある日のことだ。森でうたた寝をしそうになっていたとき、頭上に何か軽いものが乗っていることに気がつき、俺の意識は覚醒した。目を開けて手に取ると、それは幼馴染からの手紙だった。

今までは、契約した魔獣に手紙を送らせていたため、書いてから送るまでに時間がかかっていたようだが、これですぐに手紙を送れるようになったらしい。そんな文のあと、いつものように手紙が書かれて

いた。

どうやら幼馴染は今、都にいららしい。俺には厄除けの指輪を買ったとの事だ。手紙を読み終えると包みに分厚さがあることに気がついた。包みを裏返すと中身が出てくる。

銀色の光を放っている指輪で、見ていると不思議と魅了される。天に掲げてみると、蒼色の宝石が透けて見えた。気に入って、すぐに指にはめる。それをはめて仕事を再開させると、不思議と気分が良くなった。

それからまた月日は流れる。幹部が倒されたとか懐柔して味方になったとか、本当かも分からない情報が耳に入る。でも、幼馴染から手紙が届けばそれが真実である。この前は勇者について書かれた手紙も届いていた。モンスター嫌いな勇者にシンパシーを感じられていたとか、勇者と共にドラゴンに乗ってみた景色は壮観だったなど、たびたび手紙は送られて来ていたが、ある日を境に来なくなっていた。

最近魔族の活動が盛んになってきたようで、それが原因なのではないかと不安になってくる。そう思った矢先に、次の手紙が届いた。俺はいつの間にか自分の隣に届いていた手紙を慌てて開く。

もうすぐ魔王と相對するらしい。それが、怖くて仕方がない。でも、みんなの平和のために頑張らなくてはならない。

そう書かれた文字は歪んでいた。

俺には幼馴染の無事を祈るほかなかった。祈って祈って、そして時間はあるという間に経っていった。いつの間にか射撃の腕は上がっていたし、斧にも振り回されなくなった。一人でも安定して、村に来ようとする魔物や畑を荒らそうとしてくる獣を倒せるようになった。しかし、手紙は届かない。不安で仕方がなくて、それでもどうすることも出来なくて、そんな日にやっと次の手紙が届いた。

手紙の内容は、魔王の封印が完了したこと、そしてすぐにこの村に帰ってくるということだ。

その手紙を読み終えると、外がざわめいていることに気がついた。家を出て、他の村人のように夕闇の空を見上げると……そこには、大

きな鳥がいた。モンスターだろうか？こちらに向かってくる。

その巨大な鳥は村の上の十メートルくらい上を飛んでいる。逆光でシルエツトしか見えないが、誰かが鳥から飛び降りた。このままでは、怪我どころでは済まないだろう。

俺は慌ててその人物のもとまで駆け寄るが……遅い。きつと刹那には肉塊が出来上がってしまったているだろうと思つて目を瞑るが、予想に反して大きな物音一つしない。恐る恐る目を開けると、そこには銀髪の少女が宙に浮かんで、軽やかに地面に着地しているところだった。その少女は、こちらに気がつくと思つて歩いてきた。

「久しぶりですね、キコリ……ですよね？」

「お、おお……久しぶりだな、幼馴染」

久しぶりにあつた幼馴染を前にただ、懐かしい気持ちがかみ上げにくる。

「ドラゴン、みんな驚いているぞ」

「ああ、それは悪いことを。ドラ子、ありがとうございました！」

悠然と羽を広げて頭上を飛んで、どんとんと遠くへと消えていくドラゴンに手を振っている幼馴染に声かける。

「無事に帰ってきてくれて、嬉しいよ」

「私も、キコリが元気でいてくれて本当に嬉しいです」

少し固い表情で幼馴染はそう言った。村のみんなは慌てた様子で幼馴染に駆け寄る。そして魔王封印のことを聞くと、みんなは幼馴染と抱擁を交わした。そして幼馴染はすぐに集会場に連行され、その周りに人が集まってきた。もとより祝いが好きな連中だ。三十分と経たないうちに酒や肴が運ばれてきて、村長の挨拶と幼馴染の言葉を受け、宴会は始まった。最初は幼馴染の健闘を讃える声ばかりだったが、夜が深まるにつれ、乱痴気騒ぎへと成り果てた。母さんから頼まれていた食事運びを終え、ひと息ついたあとに今日の主役である幼馴染を探すと、彼女は一人で静かに酒を飲んでた。

「隣いいか？」

「はい」

少しグラスを傾けたあとに、隣に座るように促されたので頷いて椅

子に座った。

「魔王、倒したんだよな」

「封印ですよ。それに、私に出来たことは些細なサポートのみです。勇者たちがいなければ、魔王の封印は叶わなかったでしょう」

「それでも凄いよ」

「そう、ですか」

幼馴染は今までの強張った顔から一転して、安堵したような顔になった。しかし、すぐに表情を引き締める。

「モンスターはまだ各地で暴れているので、平和とは言いがたいですよ。私も、また戦わないといけない」

きつと彼女は明日にでも旅立ってしまうのだろう。幼馴染は誰もが認める優れた魔法使いにもなってしまった。それでも一つ、心配ごとがある。……彼女、どうもズボラなどころがある。料理も掃除も苦手。しかも人の良い性格だからカモにあっているんじゃないか、人がいないと保存食なんかを毎日食べているんじゃないか。勇者とともに魔王を封印した魔法使いが食い倒れて倒れてしまつたらあんまりだ。彼女の家族も心配している。だから俺は昔と同じ言葉をかけた。

「幼馴染、今度は俺もついていくよ」

「それは……」

歯切れ悪く、言葉を探している様子の幼馴染の手をそつと握ると、彼女は驚いたようにこちらを見てきた。

「勇者になりたいとかモンスターを殺したいなんて言わない。ただ俺はなじみが心配だし、お前の行ったところに行ってみただけなんだ」

それに俺だって、もう守られるだけの存在ではない。

そういうと、幼馴染は驚いたように瞬きをしたあと、微笑んでうなずいた。

彼女の世界平和のための物語はかくして、一旦は終わりを告げる。しかし、物語はここでは終われない。だって、幼馴染との冒険は、まだ始まってすらいないのだ。

でも、今この瞬間だけは。  
「今生きていることを祝して乾杯！」  
からんと、ふたつのグラスが音を奏でた。